

SF 『人魚伝説』



作

邑比古宙道
(中村道彦)

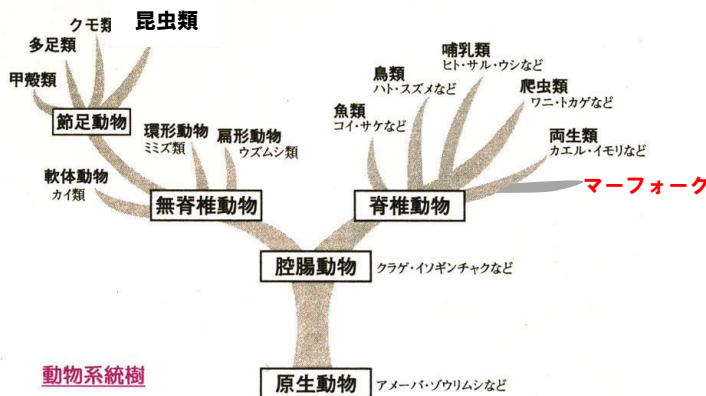
2023年12月11日



ワレは 150 歳を超えたマーマンです。生まれはカリブ海にある島です。この領域にはマーフォークの基地があり、およそ 100 体のマーピープルが住んでおります。ワレらは寿命が長く、300 歳近くまで生きるものもいます。ここでワレらのことをマーマンとかマーフォークとかマーピープルとか申しておりますのは、これらの言葉が人族になじみのある言葉であるためです。ワレらの基地はバミューダトライアングルの中にある、ここは魔のトライアングルと人族

に呼ばれ恐れられています。船舶の難破や航空機の墜落事故、あるいは突然の消滅など、不可思議なことが繰り返されていたからです。それに伴って海底にピラミッドがありそこから不思議なパワーが生まれているとか、海上の船舶を吸い込む巨大な渦があるとか、様々な憶測がされているようです。実際に海底ピラミッドは存在しています。それはワレらの海底基地だからです。とはいえ、ピラミッドから特殊なパワーが出ているとは思えません。ただ、バミューダトライアングルにはワープ航法で重要なホールを発生させるのに適している地理的な特色があります。しかし、ホールのそばを飛行しても気圧のわずかな変化を記録するぐらいで、ホール侵入装置がなければ意味をなしません。

ワレらは両生類から進化した人族とは別系統の生物です両生類を経て陸に上った人族は、長年を経て現在の人族になり、世界を支配するほどの力を持ちました。ワレらマーフォークは、本来は湖沼や河川で、生まれ育ちましたが、絶滅の可能性のあるワレらに創造主が遺伝的処置を施して、淡水でしか生活できなかったワレらが海でも生活できるようになりました。ワレらは成年期になるまで足ヒレがあり、泳ぐのは魚並みに上手です。しかも鰓呼吸・肺呼吸・皮膚呼吸が可能です。両生類は皮膚呼吸をするため皮膚に弱点がありましたが、ワレらの皮膚は強靱な皮膜でおおわれて有用ガスのみを吸収することができるようになり、さらに寒暖や乾湿、物理的侵襲などを防ぐことも可能になったため衣服を着用する必要がなくなりました。マーフォークは成人年齢になると、海や河よりも陸地で生活するようになります。それと共に足ヒレはなくなり、4 本指の足になります。手の指は 3 本です。身長は成人の大きな個体でも 150 cm 程度です。ワレらの細くきゃしゃな肉体は、本来、陸上生活には向いていません。ワレらの創造主はそのことを考え、マーロイドを配備しました。マーロイドは人族のアンドロイドのように、マーフォークに似せて造られたロボットで、マーフォークの指示によって種々の作業をこなしてくれます。殊に力仕事はマーロイドの重要な役割です。これによって、ワレらは水陸で自由に行動し、科学的遊戯で生まれた新たな発明をマーロイドの力を借りて現実に創り出すことができるようになりました。



みに上手です。しかも鰓呼吸・肺呼吸・皮膚呼吸が可能です。両生類は皮膚呼吸をするため皮膚に弱点がありましたが、ワレらの皮膚は強靱な皮膜でおおわれて有用ガスのみを吸収することができるようになり、さらに寒暖や乾湿、物理的侵襲などを防ぐことも可能になったため衣服を着用する必要がなくなりました。マーフォークは成人年齢になると、海や河よりも陸地で生活するようになります。それと共に足ヒレはなくなり、4 本指の足になります。手の指は 3 本です。身長は成人の大きな個体でも 150 cm 程度です。ワレらの細くきゃしゃな肉体は、本来、陸上生活には向いていません。ワレらの創造主はそのことを考え、マーロイドを配備しました。マーロイドは人族のアンドロイドのように、マーフォークに似せて造られたロボットで、マーフォークの指示によって種々の作業をこなしてくれます。殊に力仕事はマーロイドの重要な役割です。これによって、ワレらは水陸で自由に行動し、科学的遊戯で生まれた新たな発明をマーロイドの力を借りて現実に創り出すことができるようになりました。



上 金星の円盤(1) 1962年12月13日午前9時10分頃、米カリフォルニア州パロマー山脈のパロマー・ガーデンズ台地で、ジョージ・アダムスキーが6インチ反射望遠鏡で撮影した金星のスクワット・シップ(観測船)直径約10メートル。この写真を撮影後、円盤はアダムスキーの機上へ飛来してネガホルダーを投下した。

ワレらの科学水準は相当に高度なものになりました。その成果の一つは宇宙空間移動を可能にしたことです。この技術によって、現在は多くのマーフォークが別の太陽系に移住しています。宇宙空間移動船すなわち宇宙船は人族に目撃されることがあり、それは UFO(未確認飛行物体 Unidentified Flying Object)とか UAP(未確認空中現象 Unidentified Aerial Phenomenon)と呼ばれていますが、この騒ぎに便乗した怪しげな UFO 写真も広がり、ワレらは啞然としています。UFO 写真も時代と共にデザインがエレガントになっています。アダムスキーが報告した初期の UFO は「海底 2 万マイル」のノーチラス号のように 19 世紀末のクラシックなゴツゴツしたデザインでした。最近の UFO はスムーズなデザインで、さらに光だけで形すら見えなくなっています。ワレらの宇宙船はこの半世紀の間でデザイン的にはそれほど変化していません。ただ目撃されないように工夫はされて

きていますが。

両生類時代のワレらの先祖はすでに絶滅しましたが、創造主によって生存していた少数の個体に遺伝的操作が施され、その後、数千年かけて徐々に、ワレらマーフォークが出現しました。ワレらは創造主の手による変種であるため、創造主はワレらが地球上の生物に干渉することを固く禁じており、ワレらは海底やジャングル奥深くで、他の生命体、殊に人族との接触を避けて暮らしていたのです。



ワレらの本拠地はアトランティスでした。ワレらはアスカと呼んでおりました。古代ギリシャの哲人プラトンがアトランティスと名付けて以来、多くの人族は大西洋に消えた大陸と思っていますので、ワレらもアトランティスと呼ぶことにします。ワレらは大西洋上に巨大な人工島を造り、高度の文明都市に発展しました。時々、海洋生活を営む人族が嵐で難破して偶然、アトランティスを発見することがありました。彼らがマーフォークの存在を他の人族に伝えれば、人族の特性の一つである好奇心に火がつき、アトランティスに押し寄せてくる可能性があります。そこで、偶然の来訪者が離島するとき彼らの記憶を書き換えました。記憶の書き換えによって、

アトランティス人は圧倒的な武力をもちながら優雅な生活をする楽園のような国家というイメージを人族に与えることができました。アトランティスはその後、地震と大津波によって破壊され、ワレらはこの人工島を海中に沈め、マーフォークは世界中に分散することになりました。このためマーフォークの移り住んだ地域にはアスカの名が残されています。例えば、南北のアメリカ大陸(アラスカ、ナスカなど)、インド(アスカ)、日本(飛鳥)はその例です。



北欧に移動したマーフォークは人魚として様々な物語に登場します。カスピ海を基地にしたグループは、ワレらの掟を破ってインカ族と接点を持ち、ワレらの高度の科学技術の一部を彼らの都市建設に投入しました。それはワレらの初期の技術で、岩石を粘土のように軟化させて望みの形に成形する技術でした。巨石の運搬もワレらの飛行船で容易にできました。この技術を使って海中や陸上に精密に石積みをした砦やピラミッドを作りました。それでインカの人達はワレらを神のように崇め、大切にしてくれました。ただその時代のインカ族にはワレらの科学的知識を理解するすべもなく、ワレらを太陽神として崇め、望みませんでしたが生贄を捧げられました。またナスカ高原にはワレらの宇宙船用の港がつけられました。このインカの人族に関わったマーフォークは自分たちの痕跡を残さぬように細心の注意を払ったようですが、完全ではありませんでした。この他に、太平洋に移った者もいます。日本では河童とかアマビエなどのような、幻獣として知られ、シンガポールではマーライオンという姿で描かれています。マーライオンはシンガポールのシンボルです。マレーシアの王が沖の陸地を目指して航海に出たところ、嵐に見舞われました。王が王冠を海に沈めると嵐は鎮まり、無事に上陸できました。するとライオンが現れ、この地を統治するように言い残して去ったとのこと。そこでこの地を「シンガ(ライオン)のプーラ(都市)」となづけたという伝承があります。この海難を救ったのはマーフォークでした。

ワレらの性質は温厚で生活は平穩そのもので、闘争など危機的な事態はほとんど起こりませんでした。しかし、先ほど申したように、ワレらの体は小さく華奢であったため他の生き物の餌食になる危険があり、自分たちを守るために人族から身を隠すと共に、独自の科学を発達させたのです。ただ、ワレらの存在が知られると、ワレらを利用しようとする人族もあり、ワレらの記憶が彼らに残らぬように処置を施しました。しかし、不明瞭ながら記憶の残った者が石板などにワレらの姿を彫刻し残しております。なお、海中の構造物は砦ではなく、ワレらのふ化管理施設です。マーフォークは成人になると気の合う男女が一緒になり、子どもを望むならば受精卵をふ化管理施設でふ化させます。子ども達はある年齢になると親元に戻ることができます。

ワレらの性質は温厚で生活は平穩そのもので、闘争など危機的な事態はほとんど起こりませんでした。しかし、先ほど申したように、ワレらの体は小さく華奢であったため他の生き物の餌食になる危険があり、自分たちを守るために人族から身を隠すと共に、独自の科学を発達させたのです。ただ、ワレらの存在が知られると、ワレらを利用しようとする人族もあり、ワレらの記憶が彼らに残らぬように処置を施しました。しかし、不明瞭ながら記憶の残った者が石板などにワレらの姿を彫刻し残しております。なお、海中の構造物は砦ではなく、ワレらのふ化管理施設です。マーフォークは成人になると気の合う男女が一緒になり、子どもを望むならば受精卵をふ化管理施設でふ化させます。子ども達はある年齢になると親元に戻ることができます。

ワレらの頭脳はこのお陰で益々進化発達し、人族からみると頭でっかちな形になりました。脳自体も進化して、後頭部が張り出しており、華奢な体に大きな頭部で如何にもバランスの悪い姿になりました。この頭部全体に脳髓が占めているならワレらは立つことも歩くことも困難になったかもしれません。実際は、頭部の4分1程度が脳髓で、残りのスペースは空気袋になっています。この空気袋は、水中で生活するときの緊急用の空気や頭部を海上に浮かせるための浮力として利用できるように進化したものでした。ワレらの科学活動がさらに脳髓を刺激して、この空気袋を取り囲むように密な神経のネットワークが作られてきたのです。すなわち脳髓は中央処理中枢として働き、空気袋を覆う神経網は記憶装置や計算装置として機能しています。頭蓋骨も神経網が広がりやすいように後頭部は比較的薄く弾力性のある骨でできており、頭でっかちですが見た目ほど重くはなく、ワレらの体にはこれでバランスがとれております。

水中の薄暗い世界で生活するため、ワレらの目は顔の半分近くを占めるほど大きく、目は硬く透明な被膜で覆われています。このため目を傷つけることはありません。無論、瞼もありますので、眠る時には目をつむることもできます。水中の中では声が通りにくいため、発声器としての口は小さくなりました。それに代わり、以心伝心と言いますか、後頭部を相手に近づけるだけで相手の考えが理解できるように電磁パターンを使った意志交流能力を獲得しています。この能力は人族の一部は使えますが、限られています。人族の中にこの能力の高い者がおり、このような人族にワレらの科学の初歩的な内容を伝え、人族は長い年月を要して今の科学レベルに達したわけです。

ワレらは人族とは遭遇せぬように暮らしてきましたが、ワレらの生存に大切な河川や海水が人族の繁栄とともに汚染が進み、生活が困難になりました。そこでよりよい環境の惑星を求めて移住することになり、その頃に完成した宇宙船のワープ航法で数千光年先の星雲にまで旅たつことが可能になり、ワレらは新たな惑星で開拓を始めました。そのため現在では地球に残るマーフォークは僅かで、私も地球の成り行きを調査報告するために駐在しています。ワレらの創造主は、地球や人族を守ろうとして、ワレらを人族の黒子のように創り出し、地球という舞台上で活躍することを期待したのですが、その期待は環境汚染や人族の闘争心によって破られました。しかも人族の科学的進歩はポジティブ面とネガティブ面のバランスを欠いたものでした。科学的進歩に伴って発生する「ゴミ」や「権力」をうまく処理をしながら前進すべきですが、人族の科学的進歩ではゴミ処理や権力制御に英知を出し合うのが遅すぎた上に、そのために費やすべき労力も少なすぎたようです。

ワレは今から30年前、休暇を利用して他の太陽系に住む両親を尋ねようと思い、宇宙船を操縦して地球を飛び立とうとしました。ところがワレの船がワープ航法に入る直前に、ホールが何かの影響を受けて閉じたため、米国の砂漠に墜落してしまいました。気がつくと、見たこともない部屋のベッドに寝かされ、数人の無口な人族の男たちがワレの方をじっと見えています。ワレは逃げ出したいとベッドから起きようとしたのですが、ベッドにベルトで縛り付けられていました。彼らが頭を寄せてワレの体を覗きこもうとしたとき、ワレの頭に彼らの考えが伝わってきました。ワレらマーフォークは大体100種程度の言語を理解します。彼らは私を解剖するかどうか迷っているようでした。ワレは身も凍るような恐怖に襲われましたが、冷静さを取り戻し、彼らに生きた標本として残し、ワレの科学的知識を学ぶように、というメッセージを彼らの頭に送りました。彼らは我が意を得たりとばかりに、目と目を合わせて生きた標本にすることで合意しました。とりあえずワレはしばらく命拾いをしたわけです。

その後、人族女性研究員がワレの担当となり、原始的なMRI等の装置でワレの体を調べ、殊にワレの頭部に関心を示して後頭部の気胞を幼稚な脳波計や脳磁波測定器で調べ、それがただの気胞ではないことは理解したようです。その後、砂漠に墜落したワレの船の修理を手伝い、併せて彼らはワレの船をコピーし始めました。姿形はワレの船とそっくりですが、彼らの科学力では張子の虎

のようでなんともお粗末でした。まあ、これもワレの命を保つためと思って、張子の虎に敢えて手を加えることはしていません。それから30年、ワレはすっかりこの秘密研究所の研究者と仲良くなり、時には小声で彼らと会話をすることもありました。また、研究所の中を比較的自由に歩き回る許可も出て、彼らの科学的技術力を見ることもできました。それをみていると、石器時代の人族がジェットエンジンをみているようなものだと思います。彼らが張り子ではない本物の宇宙船を手にするまでに千年以上かかるのではと少々気の毒に感じました。

しかしこの小さな研究所の中では食べることの心配はないのですが、ただ同じような生活を毎日過ごさなければならないことにワレは耐えがたくなりました。それに両親にも会いたいし、ワレの仲間達にも会って、この小さな土産話をしてみたくくなりました。ある日、研究所の中でボヤが発生したため警備の人達はそちらに向かい、ワレの生活区域は警備が少し手薄になりました。周囲はうす暗く、人族にはよく見えない暗闇ですが、ワレの目にははっきりと周りの様子が見えます。そこで用心しながら研究所の用品を搬入するトラックの荷台によじ登りました。幸いトラックには食料品が積み込まれており、ワレの好物もありました。その内、緊張のためもあり疲れがきて寝てしまいました。ワレが寝ている間にトラックは研究所を出たようです。突然、トラックが止まりました。トラックの運転手が研究所と連絡を取り合っている声が聞こえてきました。ワレが研究所を逃走したという知らせがトラックの運転手にも入ったようです。研究所内は上を下への大騒ぎのようです。運転手もトラックの周りや荷物のチェックを始めました。

ワレらマーフォークは昔、世界中に住んでおりました。古代ギリシャではセイレーンと呼ばれ、その後ではマーメイドなどと呼ばれておりました。人族はマーフォークを、船を遭難させる怪物のように恐れていました。実際は遭難船に現れたマーフォークスは船員たちを助けようと集まっていたのですが、人族はその善意を理解せず、怪物の所業ととらえたのです。日本では、アマビエと呼ばれて病気を治すことでも知られています。ワレらはこれまで人族と対抗するようなことはしておりませんが、ただ人族に限らず、ワレらの虚弱な体躯のために、犬猫までワレらを襲うことがあり、目につかぬように生きざるを得なかったのです。

マーフォークと人族との関りは、微妙で人族の影のように、あるいは幻のように寄り添っていたともいえます。例えば、1000年以上も前のことですが、マーフォークの子ども達の間では飛行翼という玩具に人気が集まりました。非常に軽くて丈夫な翼で、小さなカバンを背負うようにして簡単に操縦できる玩具です。子ども達は翼を羽ばたかせて空中を舞いながら湖や川辺の上を優雅に飛んで、遊びに興じていました。親は子ども達が鳥に襲われるのではと心配をして、子ども達に厳しく注意をしていました。そんな様子を人族が見て、妖精や小人として童話や民話に登場させました。マーメイドの恋の話もその例です。このような話は、最近になってもワレらのミイラがみつかったとか、あまたのUFO目撃談や果てはエイリアンによる誘拐事件、そして米国の国家機関でUFOやエイリアンを隠し持っている話まで、尽きることがありません。もっともこれらのことにワレらも全く身に覚えがないというわけではありませんが。ただし、ワレらの名誉のために申しあげておきますが、人族を誘拐あるいは人体実験をするようなばかげたことはしておりません。ワレらは捕食される側にいたのでわが身を守るための科学活動を優先しました。またワレらの温順な性質もあって人族を始め他の生物を野心や遊びのために攻撃することはありませんでした。むしろ、遭難船の救助や疫病蔓延時の救護など、ワレ等の科学技術を役立てておりました。

以上、申し上げてきたこと以外で、あまり話したくはないのですが、ワレらにはもう一つの特技があります。それは変態です。周囲の物の色形に自分を似せることができます。トラックドライバーが荷台のドアを開け、ライトで中を照らしてチェックを始めました。荷台には野菜や果物が整然と積んであります。彼のライトが積み荷の一つ一つを照らしながらチェックを続けています。ライ

トがワレの身体を照らし出しましたが、彼は不審に思うことなくライトを他に移していきました。荷台には怪しげなものはないと判断したのでしょうか、ドアを閉めて運転席に戻りました。彼は誰かと連絡していましたが、すぐにトラックは動き出しました。こうしてトラックがフロリダの港に到着して、ワレは海へ向かって歩き出しました。懐かしい潮の香りにしばし陶醉する気持ちでした。

この地球という惑星に人族と共に進化して、影法師のように人族を驚かせたり、手助けをしたりして何千年の歴史を過ごしました。しかし、この母なる地球ももはや人族の手によって破壊されそうになっています。そのことを人族の中で自覚する人が少ないのは残念です。ワレらは進んだ科学のお陰で、太陽系外の惑星に平和で均整の取れた新たな世界を築き、さらに豊かな次なる時代に向かっていくと期待しています。一方、ワレらの後ろ盾を失った人族の地球は、公害や気象異常、侵略と惨殺を繰り返し、人族もそして地球も失われる運命になるのでしょうか。ワレらの創造主が人族とワレらの共存で地球の発展を願ったことは水疱と帰すのでしょうか。ワレらは人族や地球の行く末を見守るために、地球をこれからも訪問することでしょう。地球がそして人族が、今の悲劇的なシナリオとは別のシナリオに変わることを祈っています。

完